

中山間地域と島嶼地域における『地域力』の構造分析

白石 絢也*

A Study on the Structure of “Regional Potential” in the Mountainous Area and the Island Area

Junya SHIRAISHI

摘要

近年「まちづくり」や「地域活性化」といった地域の振興に資する取り組みが盛んである。その背景には、ごく一部を除き、全国的に高齢化と人口減少が進行していること、それが地域住民にとって徐々に危機感として共有されつつあることを示している。本稿は、島根県飯石郡飯南町と隠岐郡隠岐の島町を対象として実施したアンケート調査結果を使い、中山間地域と島嶼地域それぞれの「地域力」が定住意識に与える影響の構造について分析を試みた。地域力を構成するものとして、ソーシャルキャピタル、地域への誇り、生活に対する充実感・満足度を仮定した。結果をまとめると 1) 「誇り」が定住意識に有意に影響を与えている、2) 「互酬性」因子が「誇り」、「充実感」と有意に相関が認められた、3) 「誇り」と「充実感」との間には有意に相関が認められた。誇りの重要性が明らかになり、今後の定住移住促進政策に示唆を与えると考えられる。

キーワード：地域力、ソーシャルキャピタル、誇り、定住意識、中山間地域

1. はじめに

1-1. 研究の背景

近年「まちづくり」や「地域活性化」「地域再生」「地域デザイン」などと呼ばれる、地域の振興に資する取り組み、活動は盛んになる一方である。その背景には東京などの大都市を除き、全国のあらゆる地方で高齢化と人口減少が進行していることがある。また、いわゆるゼロ年代も10年を超え、地方がいよいよ正念場を迎えているためであろう。日本全体の人口が減少に転じたのが2005年、その後一

度は微増となるも2008年に再び人口減に転じ、本格的な人口減社会へと突入した。このような状況の中2015年には昭和・平成世代は全員が80歳代へと進み、世代から見ても社会状況から見てもひとつのパラダイムシフトを迎えつつあるのが現在である。

そのような社会状況において、国や県などは地域の活性化を目的として、多様な切り口で支援策を打ち出している。一次産業（農林業、水産業など）による地域振興、二次産業（ものづくり、食品加工など）による地域振興、三次産業（観光、教育、福祉など）によ

* 公共経営コンサルタント SPReD

る地域振興など実に多様である。また、一次産業を加工、流通まで連携させる六次産業化の取り組みも近年は力を入れて取り組まれている。地域振興の現場に携わる者としてみても、使いやすい支援制度の設計等年々充実している印象がある。

しかしながら、そのような支援制度があっても、その制度をレバレッジとして地域の新しいあり方や活力を高める活動に取り組める地域とそうでない地域とがあることに、筆者自身、およそ10年間仕事として地域振興に携わり気づいたことが本研究のきっかけである。また、その違いの根源は「地域力」、すなわち、地域社会が有するさまざまな資源と住民たちの「共同」の意識がどうであるかの違いにあると考えている。

1-2. 趣旨・目的

このような社会状況において、地方とくに条件不利地域と呼ばれる中山間地域や島嶼地域では、地域や集落の維持に対してどのように向き合っているのか、どのように地域を維持・活性化しようとしているのかという間は筆者にとって大きな問題意識となっている。下図は、島根県において中山間地域に指定さ

れている地域を示した図である。島根県の面積の86%が中山間地域に指定され、人口の46%が中山間地域で居住している。全国では約70%の面積を占め、総人口の約14%が居住している。なお、中山間地域とは主に農業政策で使用される用語である。

本稿では、ひとつの視点として「地域力」に着目する。この概念を用いて、条件不利地域の地域活性化に向けた状況と課題を明らかにすることが本稿の目的である。

本稿では、「地域の活性化」を「人口を一定数以上維持し続けられる状況にあること」として議論を進める。その理由については、後述する。そのため、若者たちの定住意識について分析する。またそこから、中山間地域等における一人ひとりの役割や存在感の相対的な大きさを指摘し、若者やUIターン者が地域に定住するための条件を示唆しようとする。

条件不利地域として、今回は、島根県の中山間地域と島嶼地域を取り上げる。それぞれ別の調査から得たデータであるため直接の比較はできないが、二つの分析結果をふまえ、島根県の条件不利地域の「地域力」について議論したい。



図1 島根県の中山間地域（島根県地域政策課HPより）

分析の枠組み

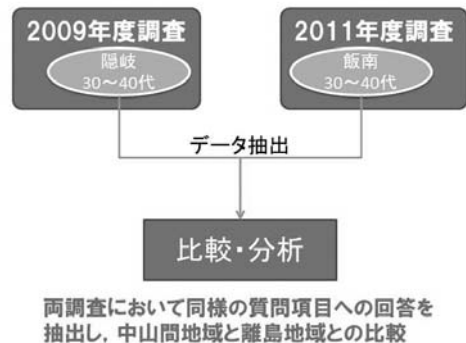


図2 分析の枠組み

1-3. 地域力とソーシャル・キャピタル

1-3-1. 条件不利地域の現状

筆者が業務で関わる地域は多くの場合「条件不利地域」と呼ばれる、中山間地域や離島地域である。そこでは、地域活性化を最終目標において、NPO等市民団体や行政、JAや商工会など経済団体等がそれぞれ地域貢献活動や産業振興等に取り組みされており、筆者はそのサポート役として関わることが多い。

このような地域で、現在もっとも大きな課題となっているのは、当該地域の現状を冷静に概観、分析し、その対策としての個別の活動を中長期的に計画・マネジメントできる人や組織が不在であることにある。従来の地域ガバナンスにおいて力を発揮してきた自治会や自治会長といった地縁組織は、集落の人口減少と高齢化でマネジメント機能の発揮を期待し求めることは難しい。また行政も市町村合併等による効率化優先と地域内における公平性の重視により、地域活性化に向けたマネジメントを期待することは難しく、あくまでもパートナーとして認識しておくことが重要である。

こうした地域や集落においても、不足しているのはマネジメント層だけで、個々の活動を実践するプレイヤーはまだ十分に力を持っていることは評価しなければならない。近年の「限界集落」論は、この点を評価せずに「高齢化率50%を超えた」という数字だけで判断するケースが多いため疑問が関係者の間で広がっているのが現状である。繰り返しになるが、まだ力を発揮できる高齢者等プレイヤーを結集し、方向性や目的を共有し、中長期にわたりマネジメントできるだけの人材や組織が、現在の条件不利地域に不足しているピースである。しかしそうは言っても、いわゆる「限界集落」と呼ばれるように過度に人口減少

が進行し、集落の共益的な活動もままならない状況になると、まだ力を発揮できるような人材も地域外に他出してしまうなど別の問題が生じる。そのため、本稿では「地域力」を発揮し、地域社会の活性化を図るためには一定以上の人口が維持されなければならないという認識にたっている。あるいは、逆も言えるだろう。すなわち、地域が活性化されるから人口も維持できる。このように、地域社会の活性化と人口動態は互いに関連しあっている。

1-3-2. 地域力という概念

「地域力」という概念は比較的新しい概念である。また、地域振興の現場やそれを後押しする行政サイドで積極的に使われている言葉であり、学術的なアプローチはあまりなされていない。

地域振興の現場から示されたものとしては、「地域力」という概念では示されていないが、長谷山俊郎(1996)が「いまひとつ重要なことは、地域の人たちの活力についてである。その場合、一般的に人間の活力は、地位や収入(または賃金)あるいは欲求によって高まる……略……これに対して、『地域の活力』とは、地域構成員の目標・方向性・願望を満たす行動をユニット化したものととらえられる。……略……地域構成員に共通的な目標や方向性あるいは願望がないと、それにもとづく行動も見られず、『地域の活力』は生まれてきがない。」と述べている。大江正章(2011)は「地域の共同の力」を広義のコモンズと「理解していいだろう」とし、元気な地域には必ず、「まっとうなものをつくり、広める」倫理観と、「適度なビジネス感覚」を持ち合わせた人たちがいると指摘している。

長谷山、大江に共通しているのは、共同・共通といった地域としての一体感を持った取

り組みである。また、長谷山は「方向性を満たす行動をユニット化」と表現し、大江は「ビジネス感覚」と表現している。共通の目標や方向性に対する計画を構築する力、企画力なども「地域力」の中には含まれているようだ。そのような取り組みが展開できる地域ほど「地域力が高い」ととらえることができる。

1-3-3. 地域力への学術的アプローチ

学術的なアプローチは現状では少ないが平成17年には、山内直人(2005)が、地域力を「地域の問題解決力、コミュニティガバナンス、ソーシャルキャピタルの3要素から構成される」としている。しかし、この3要素のうち「地域の問題解決力」と「コミュニティガバナンス」は同じものを別の言葉で示したものに過ぎない。地域の問題解決力、コミュニティガバナンスは、長谷山が指摘した「共通の目標や方向性」を構築する機能だととらえることができる。やはり、「共同」が強調されていると言える。

徳野貞雄(2007)は地域力という言葉は用いず「日本のムラ」の力として「ある共通課題に対して、ムラ中が集团的にまとまり、資金調達も含めて組織化され、高度な計画を作り、井戸やため池、林道、農道、ついでに集会施設や学校まで作ってしまいます。……略……ムラが一つの法的性格を持ち、ある目標に向かって機能的に動きます」と紹介しているが、ここに指摘されていることは、まさに長谷山が指摘した「地域の活力」の根源を示している。

このように、地域力という概念は現場での活動・取り組みをベースに、地域が発揮する活力やポテンシャルを積極的に評価しようと生み出された概念であると考えられる。いずれも、地域の住民たちにどれだけ共同(あるいはムラと言ってもよいだろう)の意識があ

るかどうかが問題にされている。

1-3-4. 「地域力」の定義

本稿での「地域力」が何を指すかを明確にしておきたい。「地域力」とは、先に述べたように、地域活性化のために地域社会が有するさまざまな資源と住民たちの共同意識である。ここでは、資源として、ソーシャルキャピタル(信頼、互酬性、参加)、共同意識に関しては、地域での暮らしへの「満足度」と居住地域に対する「誇り」の2つの指標に注目したい。これら5つの要素から構成されるものを「地域力」と捉える。

このうち、ソーシャルキャピタルについては、地域力に関して山内が指摘した構成要素のひとつにも挙げられており、地域力と密接に関連する概念である。本稿では特に「信頼」「ネットワーク(活動等への参加)」「互酬性(の規範意識)」について分析を行った。この3つの要因に着目した理由は、パットナム(2001)が示した「信頼」「規範」「ネットワーク」から構成されるとしたためである。

ソーシャルキャピタルという語は主に「社会関係資本」と訳されるが、その他にも「人間関係資本」、「市民社会資本」などとも訳される。その研究は、近年活発に、多くの分野にわたって行われている。しかしながら、ソーシャルキャピタル研究は議論が多く、ソーシャルキャピタルを構成する要素はさまざまなものがあると考えられる¹。繰り返しになるが、本稿ではパットナムが示した「信頼」「規範」「ネットワーク」について着目して分析を進める。

2. 調査の概要

本稿で対象とする地域は、島根県の南東部に位置し、広島県と接する飯石郡飯南町と、島根半島沖合約40~70kmに浮かぶ離島隠岐郡

隠岐の島町である。使用したデータは、飯南町データは、科学研究費補助金基盤研究B「瀬戸内圏農林漁業地域における女性・若者・高齢者の生活原理に関する総合的研究」(研究代表者：藤井和佐岡山大学大学院教授)の一環として2011年度に実施した調査のデータを用いている。隠岐の島町データは、科学研究費補助金基盤研究B「現代家族における公共意識の育成に関する実証的研究」(研究代表者；野々山久也甲南大学教授)の一環として2009年度に実施した調査データを用いた。

調査地の位置関係



図3 対象地域 (筆者作成)

2-1. 飯南町の概況

飯南町は、島根県の南東部に位置し、広島県三次市と接している典型的な中山間地域である。人口はおよそ5,500人、高齢化率は39.4%となっている。主要な産業は農業と畜産業であるが、近年は地域特産のヤマトイモの焼酎など加工にも力を入れ、六次産業化²にも取り組んでいる。同町の谷自治振興会は平成23年度に「過疎地域自立活性化優良事例表彰」として総務大臣賞を受賞するなど地域ガバナンスが有効に機能している面もある。また同町には県の研究機関である島根県中山間地域研究センターが立地していることも特徴である。また、平成22年度からは地域おこし協力隊³を積極的に採用するなどして地域の活

性化と定住促進に向けた取り組みを進めている。なお、高速道路尾道松江線開通を控え、国道54号が幹線道路として走る同町においては、交通量減少に伴う地域経済への打撃が懸念されている。

2-2. 隠岐の島町の概況

隠岐の島町は、島根半島沖合約40~70kmに浮かぶ隠岐諸島最大の島「島後(どうご)」から構成される。竹島は隠岐の島町に含まれている。人口はおよそ15,000人、高齢化率は33.9%となっている。主要な産業は漁業と建設業および観光業である。うち建設業は10年以上公共事業費の削減が続いており地位は低下している。観光業も旅費の高さとそれに伴う競合状態が生じており、入込客数の減少傾向が続いている。近年は雇用創出と定住促進を目的として、「エコアイランド」創出に向けた取り組みを展開している。具体的には、世界ジオパークネットワークへの認定を目指す動きや木質バイオマス等の利活用による里山・里海再生の取り組みである。同町は、隠岐郡4ヶ町村の中核であり、島根県隠岐支庁が立地している。

また、同町の武良地区の武良づくり企画実行委員会では平成19年に「過疎地域自立活性化優良事例表彰」として全国過疎地域自立促進連盟会長賞を受賞するなど地域のガバナンスは機能している地域がある。なお、同町での地域おこし協力隊の導入は平成24年度から

表1 調査地概要

	飯南町	隠岐の島町
人口	5,534	15,521
面積 (km ²)	242.84	242.95
人口密度 (1 km ² あたり)	22.8	63.9
高齢化率	39.4%	33.9%

出典：島根県統計書 (平成22年版)

始まっており、これは島根県内では比較の後発である。

2-3. 飯南町調査について

飯南町の調査は2012年に実施した。調査概要は次のとおり。

- ・対 象：飯南町に住む20歳以上の男女
- ・方 法：選挙人名簿からランダムサンプリング、郵送法。
- ・時 期：2012年1月
- ・配布数：907票
- ・回収数：637票(70.2%)うち、30～40代は110票

2-4. 隠岐の島町調査について

同調査は2009年に実施した。調査概要は次のとおり。

- ・対 象：隠岐の島町に住む30～40代の男女
- ・方 法：選挙人名簿からランダムサンプリング、郵送法。
- ・時 期：2009年12月
- ・配布数：600票
- ・回収数：275票(45.8%)

2-5. 調査分析のフレームワーク

今回使用するデータはそれぞれ独立した調査データを用いているが、定住意識や地域への誇り、地域活動への参加度など共通した項目を問うている。両調査で共通した項目もいくつかあるが、質問文が少しずつ異なっている部分もあるため、両町の調査結果を独立して分析する。また、若者の定住意識に焦点を当てるため、30～40代のデータを用いて分析している。

3. 調査結果（質問紙調査）

3-1. 回答者属性

隠岐の島町調査では30代から40代を対象としたため、20代の回答者はない(表2)。

表2 回答者の概要

		30代	40代	合計
飯南町	男性	21 44.7	26 55.3	47 100.0
	女性	29 46.0	34 54.0	63 100.0
隠岐の島町	男性	46 41.1	66 58.9	112 100.0
	女性	71 44.7	88 55.3	159 100.0

以下、飯南町と隠岐の島町の結果を概観する。

3-2. 飯南町の調査結果

飯南町の結果をもとにまずはソーシャルキャピタル3変数(信頼、互酬性、参加)について確認を進めていく。

3-2-1. ソーシャルキャピタルに関する因子

定住意識に対して影響を与えている要素について、影響力を評価する試みを以下でしてみる。まず「地域力」の構成要素であるソーシャルキャピタルに関連すると考えられる変

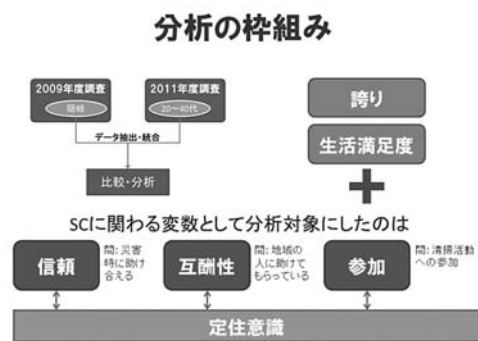


図4 分析の枠組み(2009年度、2011年度調査の比較イメージ)

表3 因子分析結果（飯南町）

	因子				
	1	2	3	4	5
	互酬性	公共信頼	親族信頼	参加	普遍化信頼
非常時地域の人と助け合える	0.694	0.278	0.032	0.146	0.058
地域の人に役立ちたい	0.687	0.193	0.169	0.026	0.109
活性化に向けて努力	0.654	-0.062	0.019	0.212	0.383
住民は信頼しあっている	0.640	0.246	0.133	0.267	0.321
地域の人に助けてもらっている	0.589	0.198	0.050	0.094	0.028
活性化活動に関心	-0.730	-0.185	-0.122	-0.086	-0.056
地域の公立学校	0.177	0.673	0.093	0.146	0.101
役場・役所	0.113	0.654	0.044	0.066	0.194
自治会・町内会	0.270	0.596	0.175	0.053	0.315
地域活動参加が負担	0.270	0.417	-0.063	0.005	0.000
家族	0.143	-0.045	0.862	0.126	-0.043
親戚	0.104	0.134	0.676	0.062	0.202
葬儀は地域住民で	0.155	0.100	0.038	0.831	0.000
住民共同で草刈り・清掃	0.227	0.108	0.206	0.648	-0.051
NPO	0.296	0.351	-0.050	0.020	0.669
近隣の人	0.035	0.087	0.459	0.117	0.459
よそから訪れた人	0.083	0.139	0.167	-0.142	0.406
回転後の負荷量平方和					
合計	3.1	1.9	1.6	1.3	1.3
分散の%	18.0	10.9	9.4	7.9	7.6
累積%	18.0	28.9	38.3	46.2	53.8

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiserの正規化を伴わないバリマックス法

a 7 回の反復で回転が収束しました。

数で因子分析を行った。その結果5つの因子が抽出され、それぞれ「互酬性」「公共信頼」「親族信頼」「参加」「普遍化信頼」に関する因子ととらえる（表3）。

このうち、ソーシャルキャピタルに寄せて考え、互酬性、参加、普遍化信頼の三つの因子に注目して以下で検討をすすめる。この3因子に注目する理由は、パットナムによればソーシャルキャピタルは「信頼」「（互酬性の）規範」「（参加の）ネットワーク」から構成されているとされていることから、「互酬性」因子と「参加」因子に注目した。また信頼につ

いて、ここでは三つの信頼に関わる因子が抽出された。この中でもアスレイナーが重要性を指摘した「普遍化信頼」に注目すべきであると考え、特に普遍化信頼に注目する。他方、公共信頼、親族信頼はアスレイナーが言う「特定化信頼」の一形態であるときとみなすことができ、たしかにソーシャルキャピタルを構成する因子ではあるが、ここでは特に普遍化信頼に注目して論じたい。アスレイナーは、「普遍化信頼」を「見知らぬ人でも信頼できる」ものとして捉えている。このことは、地域において人口の維持を目指していく中で、UIター

ン者に対する期待が高まることを背景と考えれば、特にIターン者への対応の態度として表出する要因ともなるであろう。

以下、普遍化信頼、互酬性、参加の各因子を構成する変数について性別・年齢別に平均点を示したクロス表を用いて分析を進める。

3-2-2. 普遍化信頼

普遍化信頼については、各集団・組織への信頼度について「まったく信頼できない」から「非常に信頼出来る」までの5件法で問い、それぞれに1~5点を配点した。

表4は性別に「NPOなどの団体」「近隣の人」「よそから地域を訪れた人」への信頼について、それぞれの平均点を示したものである。近隣の人への信頼度は男女とも比較的高く、よそから訪れた人への信頼度はやや低い。またNPO等に対する信頼度は中程度である。男女による有意な差は確認されなかった。

表4 性別にみた信頼得点 (平均点)

	NPO	近隣の人	よそから訪れた人
男性	3.15	3.72	2.83
女性	3.02	3.49	2.84
t値	0.86	1.79	-0.07

年齢別にみると、近隣の人に対する信頼得点において有意な差がみられた ($p < 0.01$)。30代よりも40代で近隣の人に対する信頼得点が高い結果となった。この背景には、30代より

も40代の方が地域の中で活動する機会が増していることが推測される。30代の親世代はおおよそ60代から70代前半を中心と想定され、この年代は地域の中ではまだまだ元気な担い手と位置づけられている。しかし40代の親世代になると70~80代になってくることが想定される。80代が近づいてくると徐々に地域の中で担う役割等も世代交代を進めることが考えられる。そのため、40代では近隣の人とのアクセスが増し、顔を合わせることで信頼得点が有意に高くなったと考えることができるのではないかと。NPO、よそから訪れた人に対する信頼得点は、年齢による有意な差は確認されなかった。

表5 年齢別にみた信頼得点 (平均点)

	NPO	近隣の人	よそから訪れた人
30代	3.00	3.38	2.77
40代	3.14	3.77	2.88
t値	-0.88	-2.86**	-0.73

* $p < .05$

** $p < .01$

*** $p < .001$

3-2-3. 互酬性

互酬性因子に関する変数は、地域生活に関して問うたものの中で「災害などの非常時には、地域の人と助け合える」、「地域の人のために役立ちたい」、「地域活性化のための活動に関心がある」という問に対して「まったく当てはまらない」から「非常に当てはまる」

表6 性別にみた互酬性得点 (平均点)

	非常時地域の人と助け合える	地域の人に役立ちたい	活性化に向けて努力	住民は信頼している	地域の人に助けられている	活性化活動に関心
男性	4.02	3.60	3.36	3.57	3.37	2.47
女性	3.98	3.33	3.44	3.63	3.40	2.63
t値	0.22	1.47	-0.36	-0.31	-0.18	-0.87

の5件法で聞いた。また居住地域についての問の中で「地域活性化に向けて努力している」、「地域住民は、互いに信頼しあっている」という間に5件法で問い、自身の生活の現状について聞いた中で「地域の人に助けられている」に対して5件法で問うた。

表6は性別にそれぞれの質問に対する平均点を示した。「非常時に助け合える」平均点は男女ともに高い。「役立ちたい」「住民は信頼しあっている」の平均点も3点台中ほどから後半と比較的高い得点となった。「活性化活動に関心がある」の平均点は男女ともに3点を下回った。性別に有意な差はなかった。

表7は年齢別にみたものである。「非常時に助け合える」の平均点は30代40代ともに高い。有意ではないが「活性化に向けて努力」は30代より40代で高く、「地域の人に助けられている」は40代より30代で高い結果となった。「活性化活動に関心がある」は、30代40代ともに低い。年齢による有意な差は確認されなかった。

3-2-4. 参加

参加に関する項目は、居住地域に関する質

問で「葬儀は、地域住民で行なっている」と「住民共同で、地域の草刈りや清掃などを行なっている」に対して5件法で問うている。

表8は性別・年齢別に平均点を示したものである。葬儀や共同での草刈り・清掃活動の平均点は5点に近く、性別および年齢問わず非常に高い。有意ではないが、「住民共同で草刈り」については、30代より40代で得点が高い結果となった。これは、30代では親世代が現役の担い手であり、40代になると親世代からの世代交代がすこしずつ進んでいることを示唆しているとみることができる。性別・年齢別に見た時、いずれも有意な差はなかった。

3-2-5. 共同に対する意識、および従属変数としての定住意識

共同に対する意識として、誇りは地域生活についての質問の中で「地域に誇りを持っている」に対して5件法で問い、充実感自身「今の生活について、どのように思えますか」という問いの中で「毎日が充実している」に対して5件法で問うた。定住意識については、「今住んでおられる地域に、これからも暮らしたいと思えますか」という問に対して5

表7 年齢別にみた互酬性得点（平均点）

	非常時地域の人と助け合える	地域の人に役立ちたい	活性化に向けて努力	住民は信頼している	地域の人に助けられている	活性化活動に関心
30代	3.94	3.44	3.26	3.50	3.50	2.60
40代	4.05	3.45	3.53	3.69	3.29	2.53
t 値	-0.66	-0.06	-1.32	-1.12	1.12	0.35

表8 性別・年齢別にみた参加得点（平均点）

	葬儀は地域住民で	住民共同で草刈り・清掃		葬儀は地域住民で	住民共同で草刈り・清掃
男性	4.71	4.62	30代	4.67	4.49
女性	4.65	4.60	40代	4.68	4.70
t 値	0.34	0.14	t 値	-0.10	-1.42

表9 性別・年齢別にみた定住意識・誇り・充実得点（平均点）

	地域に誇り	毎日が充実	今後もこの地域に暮らしたい
男性	3.43	3.43	4.04
女性	3.19	3.52	3.81
t 値	1.27	-0.49	1.09

	地域に誇り	毎日が充実	今後もこの地域に暮らしたい
30代	3.30	3.64	3.88
40代	3.28	3.36	3.93
t 値	0.09	1.59	-0.25

件法で問うた。

表9はそれぞれの平均点を性別・年齢別に示したものである。性別にみると、定住意識は男女ともに高い結果となった。充実感は、3点台中ほどという結果となった。誇りについては、有意ではないが女性よりも男性で得点が高い結果となった。

年齢別にみると、30代40代ともに定住意識は高い結果となった。誇りについては、3点台前半となり、比較的低い結果である。有意ではないが、充実感は40代よりも30代で高い得点となった。

3-2-6. 地域力が定住意識に影響を与える構造

ソーシャルキャピタルに関する3つの因子（普遍化信頼、互酬性、参加）に加えて、誇りと充実感の計5つの因子を独立変数とし、定住意識を従属変数とした重回帰分析を行った⁴。有意に影響を与えているのは「誇り」が0.245（ $p < 0.05$ ）だった。ソーシャルキャピタルを示す3つの変数については、定住意識に対する有意な影響はなかった。また、5つの変数間の相関分析を行った結果を重回帰分析結果に加えて、パス図にしたものが図5である。

ソーシャルキャピタルを構成する3つの因子と、共同意識に関する誇りおよび充実感と有意に相関があると認められたのは、互酬性だけだった。普遍化信頼因子と参加因子は、

パス図【飯南町】

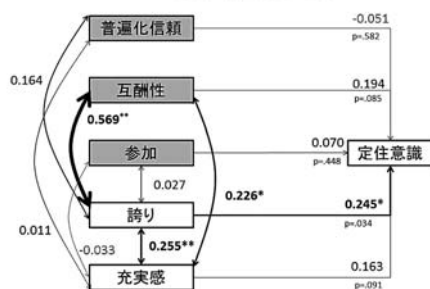


図5 パス図（飯南町）

誇りおよび充実感に有意な相関は認められなかった。

3-3. 隠岐の島町の調査結果

隠岐の島町の結果からソーシャルキャピタル3変数（信頼、互酬性、参加）についてみていく。なお、繰り返しになるが、飯南町の質問項目とは必ずしも一致しないものを含んでいる。

3-3-1. ソーシャルキャピタルに関係する因子

飯南町と同様にソーシャルキャピタルに関連すると考えられる変数で因子分析を行い、5つの因子が抽出された。それぞれ「普遍化信頼」「公共信頼」「親族信頼」「参加」「互酬性」である（表10）。このうち、ソーシャルキャピタルに寄せて考え、普遍化信頼、参加、互酬性の各因子に注目して以下で検討をすすめる。

表 10 因子分析結果（隠岐の島町）

	因子				
	1	2	3	4	5
	普遍化信頼	公共信頼	親族信頼	参加	互酬性
信頼度：自治会・町内会など、寄合い組織	0.781	0.357	0.117	0.176	0.172
信頼度：有志で地域活動に取り組む NPO などの団体	0.665	0.276	0.146	0.115	0.014
信頼度：近隣の人	0.629	0.164	0.352	0.112	0.188
信頼度：地域の公立学校	0.202	0.760	0.154	0.027	0.088
信頼度：住んでいる地域の役場・役所	0.208	0.679	0.054	-0.021	0.031
信頼度：親戚	0.248	0.157	0.866	0.020	0.027
信頼度：家族	0.118	0.087	0.391	0.048	0.236
活動頻度：自治会・町内会の活動	0.074	-0.031	-0.023	0.674	0.023
活動頻度：地域の美化に関する活動	-0.003	0.077	0.117	0.570	0.015
活動頻度：防犯・防災、まちづくりなどの活動	0.129	0.004	-0.035	0.464	0.159
災害などの非常時には、近隣どうし団結して助け合うことができる	0.058	0.098	0.079	0.196	0.537
自分はまわりの人びとに助けられている	0.205	-0.016	0.155	-0.080	0.233
自分は人の役に立っている	0.136	0.168	0.094	0.115	0.135
回転後の負荷量平方和					
合計	1.694	1.346	1.142	1.112	0.518
分散の%	13.028	10.355	8.788	8.554	3.981
累積%	13.028	23.383	32.171	40.725	44.706

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法
a 6 回の反復で回転が収束しました。

これらに注目する理由は、飯南町のケースで指摘したとおりである。

以下、普遍化信頼、互酬性、参加の各因子を構成する変数について性別・年齢別に平均点を示したクロス表を用いて分析を進める。

3-3-2. 普遍化信頼

普遍化信頼については、各集団・組織への信頼度を「まったく信頼できない」から「非常に信頼できる」までの 5 件法で問い⁵、それぞれに 1~5 点を配点した。表 11 は性別に平均点を示したものである。

NPO などへの信頼得点は 3 点台前半となり、比較的低い結果となった。自治会、近隣の人

表 11 性別にみた信頼得点（平均点）

	自治会・町内会など、寄合い組織	有志で地域活動に取り組む NPO などの団体	近隣の人
男性	3.40	3.28	3.50
女性	3.26	3.18	3.34
t 値	1.46	1.09	1.64

への信頼得点は 3 点台前半から中ほどとなった。性別にみて有意ではないが、自治会、近隣の人に対しては女性よりも男性の方が得点が高い結果となった。

表 12 は信頼得点を年齢別にみたものである。総じて低い得点傾向となった。年齢による有意な差は認められなかった。

表 12 年齢別にみた信頼得点 (平均点)

	自治会・町内会 など、寄合い組織	有志で地域活動に 取り組むNPOなど の団体	近隣の人
30代	3.35	3.23	3.44
40代	3.28	3.20	3.37
t 値	0.75	0.35	0.76

3-3-3. 互酬性

互酬性についての質問項目は、地域での生活に対する考え方を問う中で、「災害などの非常時には、近隣どうし団結して助け合うことができる」という項目に対し5件法で問うた。また、現在の暮らしに対する質問の中で「自分はまわりの人びとに助けられている」「自分は人の役に立っている」それぞれ5件法で問うた。表 13 はそれぞれの平均点を性別にみたものである。

「非常時には助け合える」と「助けられている」という質問に対してはそれぞれ4点を超えたが「人の役に立っている」という質問には3点台前半に留まった。

性別にみると「非常時には助け合える」($p < 0.01$)は有意に差があり、女性より男性の方が平均点が高い(表 13)。有意ではないが、「人の役に立っている」も得点は、女性より男性で高い結果となった。

表 13 性別にみた互酬性得点 (平均点)

	災害などの非常時には、 近隣どうし団結して 助け合うことができる	自分はまわりの 人びとに助けられて いる	自分は人の 役に立っている
男性	4.38	4.17	3.32
女性	4.16	4.16	3.16
t 値	2.73**	0.06	1.70

* $p < .05$
** $p < .01$
*** $p < .001$

表 14 は同じ互酬性の平均点を年齢別にみた

表 14 年齢別にみた互酬性得点 (平均点)

	災害などの非常時には、 近隣どうし団結して 助け合うことができる	自分はまわりの 人びとに助けられて いる	自分は人の 役に立っている
30代	4.25	4.37	3.15
40代	4.26	4.02	3.28
t 値	-0.11	4.44***	-1.38

* $p < .05$
** $p < .01$
*** $p < .001$

クロス表である。

年齢別にみたとき差が有意であったのは「人びとに助けられている」に対する回答で、40代よりも30代で有意に平均点が高いという結果となった($p < 0.001$)。

3-3-4. 参加

参加に関する質問は各種地域活動への参加の有無と、参加がある場合の頻度について問うた。具体的には「していない」を1点とし、「年に数回している」を2点、「月に1回ほどしている」を3点、「週に1回ほどしている」を4点、「週に2回以上している」を5点とした。参加の程度を当てはまるか当てはまらないかで問うた飯南町とはコンテキストが大きくことなる点に注意が必要となる。

表 15 はその平均点を性別・年齢別にクロス表にしたものである。

地域活動への参加頻度の平均点は男性の「自治会等の活動」を除き、おおむね1点台後半に集中していることがわかる。

性別にみると「自治会等の活動」、「まちづくり活動」で、女性より男性が有意に高い結果となった(ともに $p < 0.01$)。この背景としては、ここで分析対象となっている“地域活動”はどちらかと言えば旧来型・保守的な活動であり、その担い手は主に男性によって担

表 15 性別・年齢別にみた参加得点（平均点）

	自治会・町内会の活動	地域の美化に関する活動	防犯・防災、まちづくりなどの活動
男性	2.04	1.79	1.63
女性	1.79	1.66	1.19
t 値	3.18**	1.83	5.41**

* p < .05
 ** p < .01
 *** p < .001

	自治会・町内会の活動	地域の美化に関する活動	防犯・防災、まちづくりなどの活動
30代	1.79	1.56	1.33
40代	1.97	1.82	1.41
t 値	-2.13*	-3.78***	-1.01

* p < .05
 ** p < .01
 *** p < .001

われてきたことが要因として考えられる。特に女性の「まちづくり活動」得点の低さは際立つ。

年齢別にみると「美化に関する活動」(p < 0.001)と「自治会の活動」(p < 0.05)では30代よりも40代で有意に平均点が高い結果となった。この点は飯南町の信頼の項目ですすでに指摘したが、30代の親世代は地域の中でもまだ現役でいるケースが多く、40代の親世代になると徐々に世代交代を進めている、そのような端境期であることが各種活動への参加の側面からも確認されるものである。

3-3-5. 共同に対する意識、および従属変数としての定住意識

次に隠岐の島町調査での誇りと満足度および定住意識についてみていく。表 16 は、それ

表 16 性別・年齢別にみた誇り・満足度・定住意識得点（平均点）

	今住んでいる地域に、誇りを持っている	全体として、満足している	今住んでいる地域に、ずっと暮らしたい
男性	3.50	3.55	4.05
女性	3.17	3.56	3.96
t 値	2.40*	-0.06	1.02

* p < .05
 ** p < .01
 *** p < .001

表 17 年齢別にみた誇り・満足度・定住意識得点（平均点）

	今住んでいる地域に、誇りを持っている	全体として、満足している	今住んでいる地域に、ずっと暮らしたい
30代	3.30	3.68	4.00
40代	3.29	3.47	3.98
t 値	0.04	1.83	0.21

* p < .05
 ** p < .01
 *** p < .001

ぞれの平均点を性別に整理したクロス表である。

性別にみて、有意差が確認されたのは「誇り」で、女性よりも男性で得点が高い (p < 0.05)。生活への「満足度」は男女とも3点台中ほどとなり、「定住意識」は男女ともに高い結果となった。

年齢別では、「生活満足度」において差があり、40代よりも30代の方で平均点が高かった (p < 0.1)。

年齢別にみたものが表 17 である。年齢による有意な差は確認されなかった。

3-3-6. 地域力が定住意識に影響を与える構造

隠岐の島町における定住意識への影響要素について、飯南町と同様な手法でパス図を作

成し確認する。

因子分析で得られた3つの因子（普遍化信頼、互酬性、参加）に加えて、誇りと満足度の計5つの因子を独立変数とし、定住意識を従属変数とした重回帰分析を行った。有意に影響を与えているのは「誇り」で、0.313 ($p < 0.001$) だった。ソーシャルキャピタルを構成する3つの変数のうち、「互酬性」がわずかではあるが有意に影響を与えている ($p < 0.05$)。有意ではないが、参加はわずかにマイナスの影響を及ぼしている。

次に、5つの変数間の相関分析を行った。ソーシャルキャピタルを構成する3つの因子

と、誇り、満足度との相関についてみると、誇りは3つの変数いずれとも相関が有意に認められた（いずれも $p < 0.01$ ）。また満足度についても、普遍化信頼因子と互酬性因子とは有意に相関が認められた（いずれも $p < 0.01$ ）。

相関分析結果を重回帰分析結果に加えて、パス図にしたものが図6である。

4. まとめ・考察

4-1. 中山間地域と島嶼地域で共通した結果

典型的な中山間地域である飯南町では、定住意識への有意な影響が認められたのは「誇り」であった。また、「誇り」と有意かつ比較的強い相関が認められたのは、ソーシャルキャピタルの3因子の中でも特に「互酬性」因子だった。

他方、島嶼地域である隠岐の島町においても、定住意識に有意な影響が認められたのは「誇り」だった。また、その強さは飯南町よりも高い値が確認された。しかしながら、「互酬性」因子が誇りに対して、比較的強い相関が認められた点は両町において共通した結果である。

両町において共通する結果について、ここでおさえておきたい。

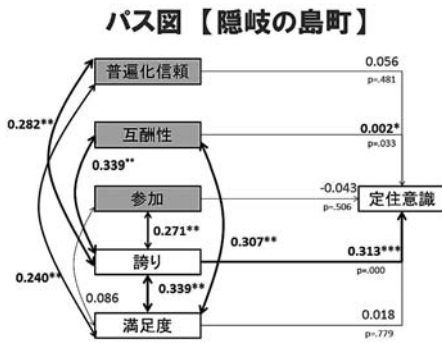


図6 パス図（隠岐の島町）

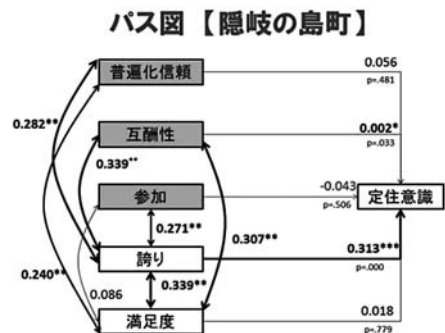
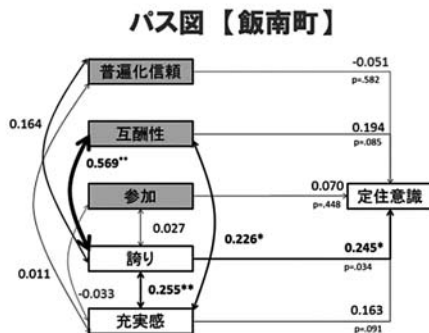


図7 飯南町および隠岐の島町のパス図（再掲）

一点目は、両町とも「誇り」が定住意識に影響を与えている。二点目は、「互酬性」因子が「誇り」、「充実感・満足度」と有意に相関が認められた。三点目は、「誇り」と「充実感・満足度」と相関が認められた。

「誇り」の重要性が示された本稿での結果については、小田切⁶の「誇りの空洞化（小田切2011）」の指摘を補強するものであると言える。

4-2. ソーシャルキャピタルが与える影響

飯南町、隠岐の島町ともに、信頼、互酬性、参加というソーシャルキャピタルを構成する3つの因子について、定住意識への影響を確認した。その結果、飯南町ではいずれの因子も有意な影響は認められなかった。隠岐の島町では、互酬性因子がわずかに有意であることが確認された。

昨今、ソーシャルキャピタルをはじめとして絆、つながり、ネットワークといった側面からのまちづくり、活性化への注目が高まっている。具体的には、人と人との絆、つながり（すなわちソーシャルキャピタル）を強化してUIターンを促進し、元気な地域へ向かうといった論調である。しかしながら、本稿での分析結果からは、ソーシャルキャピタルの強化だけでは定住意識を直接高めることも低めることもないことが明らかになった。「つながることであまくいく」、といったようなソーシャルキャピタル万能論への疑問を示す結果である。

では、ソーシャルキャピタルはまったく意味がないかというところではなく、相関分析によって明らかになったように、ソーシャルキャピタル3因子は、住民の地域に対する誇りや生活に対する充実感、満足度と相関が認められた。ソーシャルキャピタルを強化すれ

ばそれだけで、UIターン者が増え、定住人口が増加し、地域の活力が高まるという単純明快なプロセスにはならないということが今回明らかになったといえる。むしろ、ソーシャルキャピタルは誇りや地域生活に対する満足度、充実感を高めることにつながっており、間接的に定住意識に影響を及ぼしているともみさせる。

4-3. 個人としての価値付け

ソーシャルキャピタルが直接に定住意識を高めることはないことが今回明らかになった。直接的には共同意識の指標としてとらえた「誇り」が影響を与えている。では、この「誇り」はどう捉えるべきか。

ソーシャルキャピタルは地域の中で長期に渡り醸成され、育まれてきた、すでに地域の中にビルトインされている“資源”と言える。

一方、誇りは、それら“資源”に対して、地域としてどのようにアクセスし、利活用しまた保全し、価値付けを行なっているか、そしてそれを個人がどのように自らの生活や人生に価値付けを行なっているかを示すものではないだろうか。それはまさに長谷山の指摘した「方向性を満たす行動をユニット化」できていると個人が感じられるかどうかであろう。

本稿で対象とした両町ともに「誇り」が定住意識に対して影響を与えている結果となったことは、今後の地域活性化に向けた取り組みを考察する上で重要な示唆を与えているだろう。すなわち、地域の自然環境や産業構造に加えたソーシャルキャピタルという“資源がある”だけでは、そこに住み続けるモチベーションを高めることができないということを示している。しかし、そこに住んでいること、当地での暮らしそのものに対してうまく価値

付けができれば、地域の人口維持、UI ターン促進といった取り組みにも展望が開けてくるのではないか。そして、その価値付けを行うプロセスが「誇り」を高めることとなるだろう。

4-4. 価値付けの強化としての取り組み

ここで、飯南町、隠岐の島町の取り組みを振り返ってみたい。図らずも両町ともに「過疎地域自立活性化優良事列表彰」を受賞している。これは地域の中にある資源に目を向け、自らが主体となって活用し、そこで暮らしていることの価値を再評価しようという試みのように思える。飯南町ではヤマトイモを使った商品開発などに取り組んだり、ジャーナリストキャンプを開催したりしている。これらは地域に眠っている資源に光を当てる行為であり、また地域外の第三者の視点から地域を見つめ直す行為である。第三者の言葉は、地域を冷徹に見据え、時に厳しい言葉もあるだろうが、それが個人の中で昇華されることで価値付けが行われる。

また、隠岐の島町ではより具体的、直接的に「エコツーリズム」を推進している。これは離島という地理的隔絶性を逆手に取り、島の価値を正当に評価し、本土との違いを自らのアイデンティティとして昇華させ、島民に誇りを持って隠岐を語ってほしいという思いからスタートしたものである。これはまさに個人個人の価値付けを「エコツーリズム大学」という仕組みとして構築し、誇りを高めようとしている事例である。今回の結果で飯南町よりも隠岐の島町で高い値が出たのは、この取り組みの成果が現れ始めたともみならずともできるかもしれない。

4-5. おわりに

2011年3月11日の東日本大震災発災以降、全国で“絆”に対する眼差しが強くなっている。このような現状に対し、筆者はここまでソーシャルキャピタルは定住意識に直接の影響を及ぼさない、と一見否定的な見解を述べてきた。しかし、筆者は絆やソーシャルキャピタルといった人間的なつながりを否定するものではない。むしろソーシャルキャピタルは地域の活力を生み出すためには欠かすことのできない重要な資源であり、推進剤となるものと認識している。

本稿で指摘したいのは、そのような“資源”をただあるものとして漫然と受け止めるのではなく、地域として集落として、そのような“資源”を戦略的に活用し、保全し継続していける仕組みを構築すること、そしてそこで生活する個人個人が自分たちのこととして感じられる仕組みが必要だと考える。

ソーシャルキャピタルとそれを活用する仕組みが充実することで誇りを取り戻し、あるいは誇りを高めることで地域力が高まる。地域の活性化ははじめて動き始めるのではないだろうか。

注

¹ たとえばソーシャルキャピタルに関してもっとも影響力のある研究者の一人である R. パットナムは、「信頼」「規範」「ネットワーク」から構成されるとした。その他ソーシャルキャピタルに関する議論を歴史的に概観しておくとして、L.J. ハニファンは「メンバー相互の善意、友情、共感、社交を指す。金銭に還元できる資本とは異なる、金銭に還元できない資本という比喩である」としている。津田(2012)はこの定義に加えて『『他人に対して気軽に何かをやってあげる』という具体的な

アクションや気持ち」を付加したいと述べている。

P. ブルデューはネットワークで定義し、「多かれ少なかれ制度化された相互面識および相互承認の持続的ネットワークの所有、あるいはいいかえると、全体で所有する資本の支援を各メンバーに提供するような集団のメンバー資格に結びついた現実的あるいは潜在的資源の総体」としている。

J. コールマンは経済学者のいう「人的資本」をベースに、「他の形態の資本とは異なり、ソーシャル・キャピタルは人々間の関係の構造に内在するもの」とし、経済生活だけでなく、社会生活全般において重要であるとした。

F. フクヤマは、アメリカにおける「信頼(Trust)」の水準低下を問題視し、「信頼」を「コミュニティの他のメンバーが、共有された規範にもとづいて、規則正しい、正直な、そして協調的な行動をとると考えられるようなコミュニティにおいて生じる期待」と定義し、SCを「集団を構成するメンバーの間で共有されるインフォーマルな価値あるいは規範の集合」とした。

E. アスレイナーはSCのベースとなる「信頼」について「普遍化信頼」と「特定化信頼」に分けて考える必要性を指摘し、見知らぬ人でも信頼できるとする「普遍化信頼」の重要性を特に強調している。「特定化信頼」とは、「特定の人あるいは人の集団に対する信頼」であり、それは明確な証拠や経験に裏打ちされた人々に対する信頼である。

なお、ボウルズとギンティスは人間関係を示すソーシャルキャピタルを、「資本(Capital)」として所有できるものではないとしてその用語を批判している。

² 六次産業化とは、第一次産業で得られる生産

物を、第二次産業および第三次産業と連携し、加工から流通、マーケティング等までできるだけ地域で取り組み、商品の高付加価値化を図ろうとする取り組みである。商品の川上から川下まで一体的に取り組むことで地域に雇用創出効果と経済効果を期待されている。

³ 平成24年12月現在で飯南町は8名、隠岐の島町は1名が協力隊として活動に従事している

⁴ 因子得点を用いた

⁵ 独立変数には、質問文は、「あなたは、次のような人びと、集団・組織をどのくらい信頼できますか」

⁶ 小田切は、現代農山村で発生している多面的な問題について、「人」「土地」「むら」の空洞化と表現している。「人の空洞化」は、文字通り人口減少により確実に地域が縮小していく状況を示している。「土地の空洞化」は、耕作放棄地の増加等の状況を示している。「むらの空洞化」は、人の空洞化、土地の空洞化に引き続いて引き起こされる、集落機能の著しい低下を示す。「誇りの空洞化」とは、3つの空洞化の深層で進行している「地域住民がそこに住み続ける意味や誇りを見失いつつある」状況としている。

引用文献

- 1) 『地域活力向上のデザイン』、長谷山俊郎、農林統計協会、1996。
- 2) 『地域の力』、大江正章、岩波新書、2011。
- 3) 北海道知事政策局による『ソーシャルキャピタルの醸成と地域力の向上』の研究報告、2005。
- 4) 『農村の幸せ、都会の幸せ』、徳野貞雄、生活人新書、2011。
- 5) 『哲学する民主主義』、ロバート・D・パッ

トナム，河田潤一訳，NTT出版，2001.

安島博幸・藤山浩共著，株式会社ぎょうせ

6) 『これで納得！集落再生—「限界集落」の

い，2011.

ゆくえ—』，大西隆・小田切徳美・中村良平・